

それは、まことにすばらしいながめでした。庭の一番向こうの角に、愛らしく、白い花で、すっかり包まれた木が、一本ありました。えだは、すべて金色で、銀色の果実がたれ、その下に、大男が愛していた小さな男の子が、立っていたのです。大きな喜びに包まれ、大男は階だんをかけおり、庭へ飛び出しました。草

むらを走りぬけ、その子のそばへ、やって来ました。すぐ、近くまで来ると、大男は、いかりで顔を赤くして言いました。

「いったい、だれが、そなたに、きずをおわせたのだ」と、いうのは、その子の両方の手のひらには、くぎのあとがあり、小さな両足にもくぎのあとが、あったからです。

「いったい、だれが、そ

なたに、きずをおわせたのだ」と、大男はもう一度さげびました。「教えてくれ。わしが、そいつを殺してやるから」「そうではない」その子は、答えました。「これは、愛のきずなのだよ」「あなたは、どなたですか」大男は、言いました。すると大男は、ふしぎな気持ちかわいてきて、その小さな子の前に、ひざま

ずきました。その子は、大男にほほえみかけ、こう言いました。「かつてあなたは、この庭で、わたしを遊ばせてくれた。今日は、あなたが、わたしの庭へ、いっしょに来るのだ。わたしの庭、パラダイスへ」その日の午後、大男の庭に遊びに来た子どもたちは、大男が幸せそうに、いすでねむっているのを、みつけま

した。「あそばせて」と
声をかけても、大男は何
も答えません